

想定外の世界とN I E

長野県新聞活用教育(N I E)推進協議会長
信州大学学術研究院教育学系教授

松本 康



2019年10月に亡くなられた教育哲学者の上田薫先生は、よく講演で「想定外の問題にどう立ち向かうか」という話をされていた。上田薫は学徒出陣の後、終戦後の文部省に入り、昭和22年の社会科の発足に関わった、社会科の生みの親の1人である。その後、初期社会科の問題解決学習の完成型と言うべき昭和26年版社会科学学習指導要領を作成し、多くの著作を残した。長野県の実教現場との関わりも深く、カルテ・座席表・抽出児など、長野県になじみの深い授業研究の方法論は、上田薫の思想をその根源とする。

「想定外の問題」とは、既存のパターン化された手続きによっては解決できない問題である。既存の手続きを守ること、前例を踏襲すること、ものごとを考えやすい範囲に限定して結論を導き出すこと。これらは「想定内の問題」の発想であり、昨日と今日と明日が連続した世界の中にある、という前提のもとでは有効な解決法である。

「想定外の問題」は飛躍を伴う。「まさかそんなことが起こるとは思ってもみなかった」。21世紀に入ってから、私たちはいかに多くの「想定外」を見てきたことか。同時多発テロ、震災と津波、原発事故、中世回帰のイスラム国家、集中豪雨、火山噴火、気候変動、台風と洪水、そしてコロナウイルス。

歴史的には「想定外」は当たり前で、今が特別な時代ではないのかもしれない。それでもこれからの厳しい世界を生きてゆかなければならない子どもたちには、何とか生き延びて欲しいと切実に願う。

教室の優等生の多くは「想定外の問題」に弱い。ワークブックや「問題集」にはたいてい後ろに「正解」がついている。正解の定まっているものをなぜ「問題」と呼べるのか。問題とは本来、正解がないゆえに切実に解決すべきものではなかったのか。教科書や参考書、カリキュラムは一昔前に比べると、とてもわかりやすくなった。大学の授業も今やわかりやすさを優先して、むき出しの難問を避けつつある。だが、わかりやすさとは、しょせん「想定内の問題」に安住しているに過ぎないのではないだろうか。教科書はそれが作られた時点で、世界に向けて閉じられている。

新聞の記事は現実の世界で起こっているリアルな問題を突きつける。新聞はつじつまの合わない「想定外の問題」が数多くあることを教えてくれる。秩序ある世界の認識はリアルな難問によって壊され、本当の世界に向けて常に更新されてゆく。そこで驚き、とまどい、悩むことを「楽しい」と思える子どもをこそ、N I Eでは育てたい。